

# 東日本大震災復興まちづくりにおけるジャスミン革命

## ～気仙沼地域を事例として～

慶應義塾大学 政策・メディア研究科 修士1年

緒方 伊久磨

### 1. 研究概要

#### 1.1. 研究目的

本研究は、下のイメージのように市民・行政・専門家が同じレイヤーに立ち、それぞれおのプロジェクトを自律分散協調しながら行っていくという「ジャスミン革命型復興まちづくりシステム」の構築し、このシステムがもたらす効果を把握することを目的に行った。

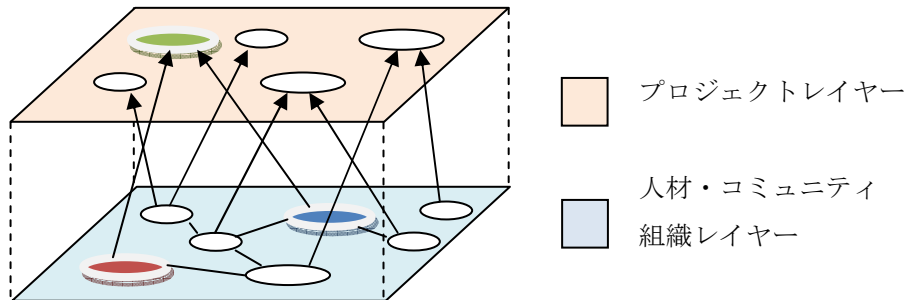


図1：ジャスミン革命型まちづくりシステムの構造

#### 1.2. 研究の狙い

本研究で検証するまちづくりシステムは、下図のような既存の行政を頂点としたヒエラルヒーに基づくトップダウン型やボトムアップ型・市民ネットワーク型まちづくりとは全く異なる。街に関わる全ての人材・コミュニティ・組織が同じレイヤーに立ち、各々の能力を活かせる各プロジェクトに参加、プロジェクト同士を並行的に推進させながら復興まちづくりを進めていくものである。これにより実行主体ではなくプロジェクトに重点が置かれることを狙いとした。

本システムの特徴は、議論のプロセスをオープンにできること、多くの市民の声の反映できること、将来ビジョンや構想についてプロジェクトの進度に応じて柔軟に対応できることの3点である。

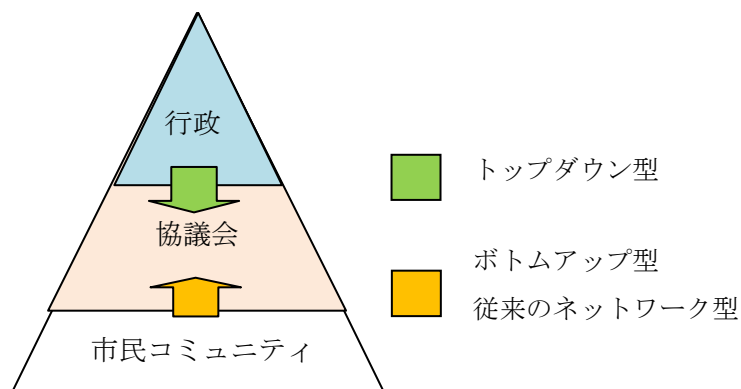


図2：既存のまちづくりに関する組織体系

### 1.3. システム構築のための研究手法

本研究は、システムを実際に構築しながらその効果を検証していくアクションリサーチの手法を取った。

具体的には、SFC を中心に組織された「気仙沼復興支援プロジェクト」の中に「ざんぞがたり班」というグループを組織し、そのメンバーと共に「Facebook ページ」「ざんぞかたり」「Yoriai 3.11」を運営しながら、ジャスミン革命型まちづくりシステムが持たらす3つの効果について調査した。

### 2. Facebook ページ

本研究では、既存のネットワーク（職能・世代・地域コミュニティ）を超えて時空間の制約を受けることなく復興まちづくりの議論を行っていくため、「3.11 から気仙沼をデザインする」という Facebook ページを立ち上げた。このページは、2月28日時点で718人のメンバーを抱えている。

このページはジャスミン革命型システムの「議論のプロセスをオープンにできる」「多くの市民の声の反映できる」という2つの特徴を強く持っている。また、FacebookなどのSNSが持つ誰でも参加でき時空間などの制約を受けずに議論が進行できるという特徴があいまって、当議論に参加する人数は開設初期爆発的に増加した。5月は一月に166人、6月は187人の参加者がグループに加入し盛んに議論が行われた。

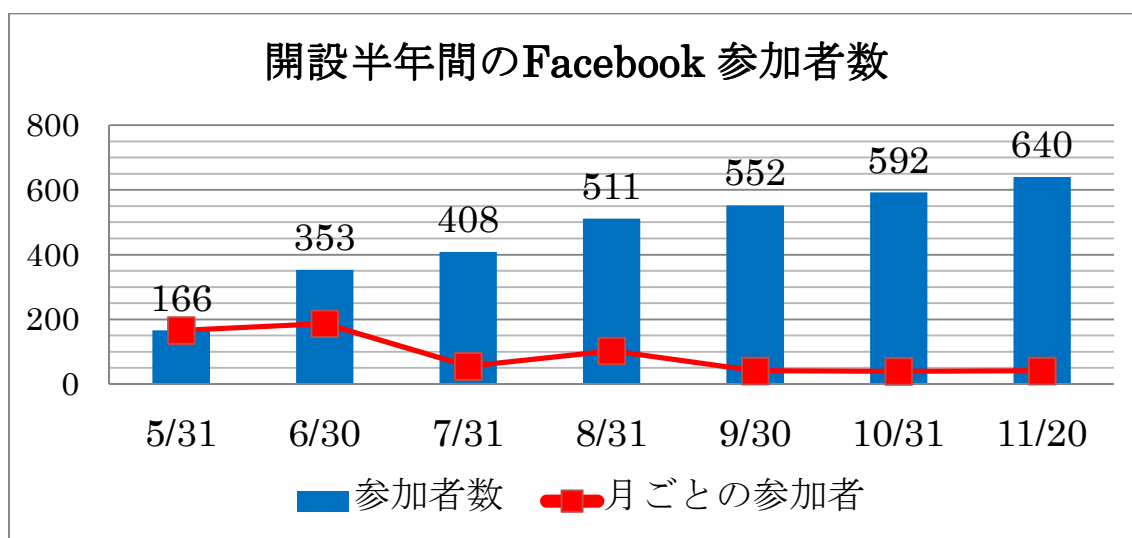


図3：ページ開設半年間の参加者数の変遷

議論の内容は、長期的な復興イメージに関するものから短期的な各区画の復興計画、避難所に関する情報に至るまで様々なものが飛び交った。その復興に関する議論の量は6月末までの2ヶ月間に400を超えた。この結果は、本システムの「議論のプロセスをオープンにできる」「多くの市民の声の反映できる」という2つの特徴が非常に効果的に作用したと私は考えている。

しかし6月末頃になると、議論が拡散を続けていったために本システムの「議論の集約が難しい」という難点が如実に現れてきた。そこで、400を超えるイメージをオフラインミーティング上で集約させ、それぞれのプロジェクト化していく組織の必要性に迫られた。

そこで、ジャスミン革命型まちづくりシステムの第二段階として得られた意見をプロジェクト化していくためのオフラインミーティング「ざんぞかたり」を7月に東京、8月に気仙沼でそれぞれ行った。

### 3. ざんぞかだり

ざんぞかだりは、7月8日に東京都世田谷区二子玉川にて、8月11日に宮城県気仙沼市にて開催された。それぞれのざんぞかだりには20人～30人の参加者が集まり、3時間以上に及ぶ議論が行われた。

東京の会場が設定されたのは、Facebookのページが気仙沼に協力しているが現地にいけない人との交流の場に変化しつつあり、現地の人プロジェクトのアイデアに対し意見をプラスさせブラッシュアップしていくことで有効な復興アイデアの議論が可能になるのではないかと考えたからである。

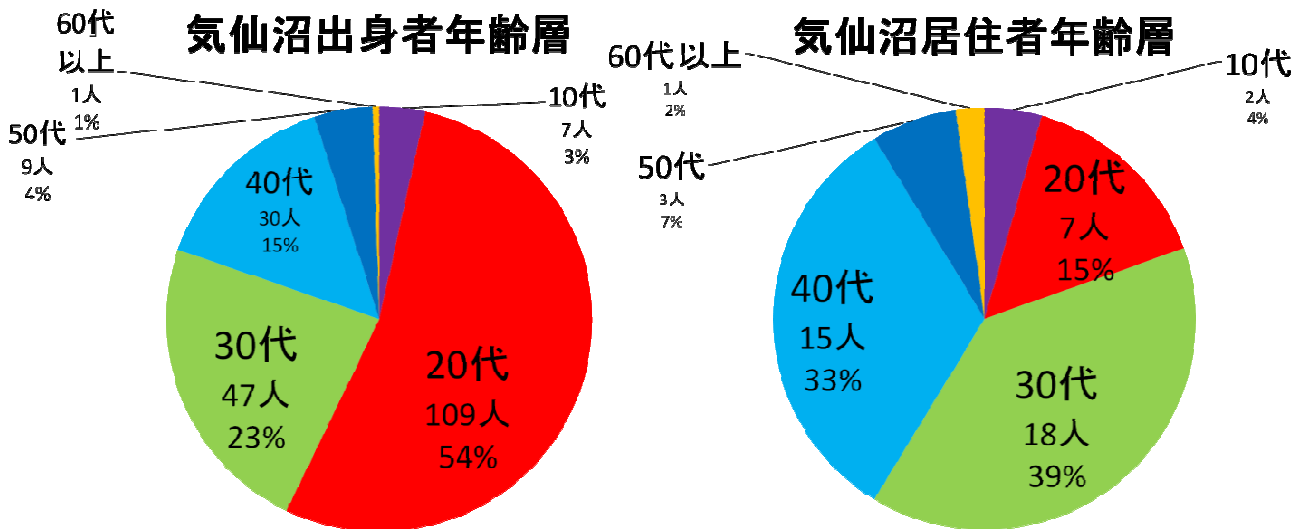
この2回のざんぞかだりの議論によって、400あったアイデアは、7つの提案にまとめられた。これらの提案は「未来の気仙沼」と題されて慶應SFC気仙沼復興支援プロジェクトの夏の提案集の一部として気仙沼市役所に提出し、市の復興計画策定の参考とされている。



写真1：宮城県気仙沼市で8月11日に行われた「ざんぞかだり in Kesenuma」の様子

### 4. Yoriai 3.11

本研究を推進している途中で、Facebook及びざんぞかだりの参加者が「気仙沼市在住者」と「気仙沼市外在住者」で年齢層に差があることが分かった。特に、両プロジェクトとも気仙沼市出身者が比較的多く加入していたが、同じ気仙沼市出身者の中で「気仙沼市在住者」と「気仙沼市外在住者」に特に明確な年齢層の差が見られた。



グラフ左：11月末時点でのFacebookページにおける気仙沼出身者の年齢層  
グラフ右：11月末時点でのFacebookページにおける気仙沼居住者の年齢層

これは、気仙沼市が若者の人口流出が激しい都市であり、市外に流出した若者が東日本大震災を受けて地元の復興まちづくりに対して強い関心を持っているためであると予想される。

そこで10月より、気仙沼で復興まちづくりをしている人々のうち特に学生を対象を絞り、学生間の協力関係と問題解決策の共有によるまちづくり活動推進ネットワークを構築するため、Yoriai 3.11 という活動を始めた。

この団体によって、私は、学生に限ったジャスミン革命型まちづくりシステムの先行事例づくりを目指した。この団体では、「意見収集」「意見集約」「プロジェクト運営」の3つのフェーズの最後のフェーズに関しての実証実験である。

このプロジェクトについては、実験段階であり来年度も引き続き効果測定を行っていく予定である。ここでのプロジェクト同士の自律分散協調関係が成立すれば、ジャスミン革命型まちづくりシステムが成立することが証明される。そして、ここでの問題点及び効果について他の事例と比較することにより、ジャスミン革命型まちづくりシステムのアクションリサーチによる効果測定が行えると私は考えている。



写真2 : 10月に仙台市で行われた Yoriai3.11 でそれぞれの組織の特徴や問題点、協力しあえる点などについて書き出していく参加者達

## 5. 成果発表及び今後の方針

本研究は、今年度の緒方伊久磨の研究プロジェクト報告書にまとめ成果発表を行った。また、KEIO SFC JOURNAL に連名にて執筆・掲載される予定である。さらに、2012年3月中旬頃にJR東日本フロンティアサービス研究所にて開催予定の成果報告会ポスターセッションでも成果報告を行う予定である。

本研究は、来年度も Yoriai3.11 を中心に参与観察を続けていく予定である。また事例比較として、長崎県島原市雲仙普賢岳被災地区及び東京都三宅村の三宅島にて被災後のUIJターン者によるまちづくりの進行状況に関する調査を行う。

本研究は、2011年度森泰吉郎記念研究振興基金研究者育成費の援助により行われた。